

1871年刊行の大学南校のドイツ語教材について：  
言語的特徴から見た編著者問題を中心に

|       |  |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2008-02-27<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 城岡, 啓二<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.14945/00000634">https://doi.org/10.14945/00000634</a>                  |

# 1871年刊行の大学南校のドイツ語教材について 一言語的特徴から見た編著者問題を中心に

城 岡 啓 二

## 0. 前書き

1. 大学南校の1871年刊行の2冊のドイツ語教材
2. 第3巻の著者はワグネルか
3. 第1巻の編著者はカデルリーか、ワグネルか
4. 日本人(教員)との協力関係はどうだったのか
5. 要約と未解決の問題

## 0. 前書き

大学南校のドイツ語教材については1870年刊行の2冊が比較的知られている。Jakob Kaderly 編の *Lehrbuch der deutschen Sprache für die höhern Classen der kaiserlich-japanischen Akademie Daigaku Nanko*<sup>1</sup> (以下『カデルリー文典』と呼ぶ) と *Die ersten Lectionen des deutschen Sprachunterrichts*<sup>2</sup> (以下『最初のドイツ語レッスン』と呼ぶ) の2冊である。大学南校では1871年にも *Deutsches Lese- und Uebungsbuch*<sup>3</sup> (以下『ドイツ語の読み物と演習』と呼ぶ) というシリーズで第1巻と第3巻の2冊を出版している。現存する大学南校の教材は、『カデルリー文典』第2版<sup>4</sup>を別にして考えれば、1870年刊行の教材が2冊と1871年の教材が2冊の合計4冊である<sup>5</sup>。本稿の考察の中心は1871年刊行の『ドイツ語の読み物と演習』である。今のところ、静岡県立中央図書館葵文庫にしか所在が確認されていないが、葵文庫には第1巻と第3巻がそれぞれ2部ずつ<sup>6</sup>ある。第2巻はない。先行研究で第2巻の存在について明確に触れているものもないので、出版されなかった可能性もある。『ドイツ語の読み物と演習』は葵文庫にしかないこともあって、内容についてあまり知られていないようであるし、不正確な記述も見られる。じつは、大学南校のドイツ語教材は『カデルリー文典』以外は編著者名もないし、序文も説明もない中身だけの教材になっている。したがって、それがどのような教材であるのか編著者の説明をも

とにすることはできないし、そもそも誰が編著者なのかも不明なのである。教材の内容を紹介することも本稿の目的のひとつであるが、もうひとつの目的は、教材の内容に含まれる言語的な特徴により、編著者について考え、お雇い外国人教師と日本人（教員）のあいだに協力体制があったのかどうかも推定したい。誰がどのようにして教材を作成したのかという問題を広く捉え、本稿では編著者問題と呼ぶことにする。

なお、明治初年に出版されたドイツ語関係の図書で、明治3年までに出版されたものは大学南校のドイツ語教材以外にはない。『ドイツ語の読み物と演習』の2冊は1871年刊行であるが、第1巻は明治3年刊行であり、第1巻の方は日本における最初期のドイツ語教材のひとつである（西暦と和暦のずれについては後述する）。第3巻は明治4年刊行である。明治4年以降になると、初級の教材がかなり大量に出版されている。宮永（2004:340-341）は明治4年刊行の「初級入門書的なドイツ語学書」として、刊年推定のものもあるようだが、『普語箋』（中村雄吉著）や『独逸文典字類』（春風社）などの単語集なども含めて19冊あげている。しかし、『ドイツ語の読み物と演習』第3巻は初級教材ではなく、当時の入門書的なドイツ語教材とは一線を画する存在だったと思われる。

さて、大学南校であるが、幕末・明治初年に目まぐるしく変遷するこの学校の前身や後身についても簡単に説明しておこう。

大学南校とは開成学校が名前を変えたものであり、もともと江戸幕府の洋学研究・教育機関であった開成所を維新後に維新政府が開成学校として復活させたものである。幕府の開成所のみなもとをさらにたどると洋書調所、蕃書調所、洋学所と名称をくるくる変えていく。日本でドイツ語学習が本格的に始まるのは幕府の蕃書調所である。1860年頃とされるが、市川兼恭（齋宮）や加藤弘之（弘蔵）らがプロイセンとの条約交渉をきっかけに始めている。

話を明治の大学南校に戻すと、大学南校自体も、明治4年7月に大学が廃止され文部省が設置されるときに、大学南校から南校に名称が変わっている。したがって、厳密に言えば、大学南校という名称の学校は明治2年末から明治4年7月までの短い期間しか存在していないことになる。なお、「大学」といっても、現代の大学にそのままつながるものではなく、幕府の儒学の学校であった昌平坂学問所が維新後に和漢の学校として復活し大学校とされ、後に大学に改称された。この大学には大学南校や大学東校（医学校の後身）を従えるという統括機能も持たされていたために、開成学校や医学校が大学南校や大学東校と呼ばれることになったのである。大学南校は、当時の用語で言えば、「専門科」では

なく「普通学」を教える学校であり、高等教育機関というよりは中等教育機関としての学校であると言える。

1871年ごろのドイツ語学習の状況についても簡単に述べておこう。1871年時点で蕃書調所における日本のドイツ学の起源から10年余り経っているわけであるが、ドイツ語の学習環境はほとんど改善されていない。幕末期から待望されていた独和辞典は1872年(明治5)にならないと出版されないし、先行する英語やフランス語とは違い(大学南校では英語とフランス語とドイツ語以外の言語は教えられていない)、大学南校の日本人教員の留学なども進んでいない<sup>7</sup>。また、オランダ語学習が急速に衰えたから<sup>8</sup>、ようやく輸入されるようになった独蘭辞典もすぐに役に立たなくなったのではないかと思われる。ドイツ語のできる日本人もまだほとんどいなかった時代である。明治3年の普仏戦争の開戦後、横浜の貿易商高島屋嘉右衛門が北ドイツ連邦のプロイセンから商船ライン号を購入したが、購入代金はプロイセンの戦費にもなるわけで、フランスから抗議を受けるといふ事件があったが、山岸(1937b)によると、この時、外務省から大学南校にライン号の売買契約書の翻訳の依頼があったことが明治3年の大学南校記録に書かれている。外務省からの文書には「ゼルマン語に付き未だ当省には同国の学術心得居候者無之に付き翻訳出来兼候」と書かれていて、当時は外務省にさえ簡単なドイツ語の契約書の意味がとれるひとがいなかったことが分かる。大学南校のドイツ語教材が作成されたのはそんな時代だったのである。

本稿では西暦と和暦が混在しているが、意図的に使い分けている所もある。明治6年以前は今の太陽暦ではなく、西暦と和暦が単純に対応していない。煩わしいと思うが、理解されたい。

## 1. 大学南校の1871年刊行の2冊のドイツ語教材

前年の『最初のドイツ語レッスン』は木版印刷されているが、『ドイツ語の読み物と演習』は『カデルリー文典』同様に活字印刷されている。オランダから幕府に寄贈されて、蕃書調所で市川兼恭などが始めた活字印刷の設備と技術<sup>9</sup>で印刷されたものであろう。前年の『カデルリー文典』と『最初のドイツ語レッスン』と比べると、17センチ×12センチの目立たない小冊子である。1870年刊行の『カデルリー文典』は522ページもある大部の本である。もう一冊の『最初のドイツ語レッスン』はページ数は少ないが、30センチ×22センチの大型の本であり、木版印刷であり、目立つ本だと言えるだろう。『ドイツ語の読み物と演習』がなぜ葵文庫にしか残らなかったのかは、こんな外観上の特徴も関係し

ているのではないだろうか。当時としては珍しかった活字印刷も後年は当たり前になってしまったことも他の図書館などでの保存がされなかった理由かもしれない。今日まで葵文庫に保存された理由としては、江戸幕府旧蔵書としての葵文庫といっしょに保存されたことが幸いしたのではないだろうか。

なお、葵文庫の本は静岡学問所経由で残ったと考えられるが、幕府開成所が維新後に開成学校、大学南校、南校とつながっていく中で、津田真一郎（真道）や外山捨八（正一）など、幕府開成所から静岡学問所への人の流れもあったわけであるから、静岡学問所と大学南校とのあいだにもなんらかの人的なつながりが続いていたと想像することができるだろう。静岡県立中央図書館に大学南校のドイツ語教材だけでなく『大学南校生徒心得』の写本が残されているのはそんな理由からではないだろうか。『大学南校生徒心得』は内容に異同のある別の写本が東京大学に所蔵されているだけで他には知られていないようである（『東京帝国大学五十年史』（上冊）第1篇第1章）。

それでは、まず、『ドイツ語の読み物と演習』の第1巻と第3巻に共通する特徴をまとめてから、それぞれの教材の構成を紹介しておこう。

### 第1巻と第3巻に共通する特徴

まず、共通する特徴として出てくるのは、ローマ字で日本語が使われているという点であろう。日本語がローマ字になっているのは、大学南校で日本語の活字印刷などができなかったことも関係していると思われるが、『ドイツ語の読み物と演習』の特異な特徴になっている。大学南校から前年に出版された2冊のドイツ語教材『カデルリー文典』と『最初のドイツ語レッスン』は日本語が使われていない。『ドイツ語の読み物と演習』と同じ1871年刊行の『官許仏和辞典』は、フランス語も日本語も活字印刷されているが、上海で印刷されている。明治4年には、『独逸文典字類』、『独逸訳附単語篇』、『普語箋』などの独和単語集が次々に発売されているが、高橋（1993, 1994, 1995）によればすべて木版印刷である。日本語を漢字も入れて印刷するには上海で活字印刷するか、木版印刷になるかのどちらかだったようだ。

ドイツ語の書き方では、ドイツ文字（亀の子文字、亀の甲文字とも）とラテン文字（現代ドイツ語と同じ文字）の両方が使われている点も特徴になっている。前年の『カデルリー文典』は基本的にはドイツ文字で書かれ、外来語系のPräsensのような文法用語を見出しのように使う場合にだけラテン文字が使われていた。『最初のドイツ語レッスン』は読み書き入門教材（Fibelと呼ばれる

ジャンルの教材) であるが、ドイツ文字による学習が中心になっており、後半でラテン文字も学習することになっている。『ドイツ語の読み物と演習』では、第1巻のドイツ語でラテン文字が使われているのは、扉(図1)の一部とドイツ語で書かれた章の見出しがそうである。扉では本のタイトルと「第1巻」と「1871年、明治3年に大学印刷所で印刷」という内容がラテン文字である。日本語のローマ字はすべてラテン文字だ。第3巻では、ドイツ語の文章が、1章はドイツ文字、2章はラテン文字というように、章によって交互にドイツ文字とラテン文字が使われている。巻末単語集ではドイツ語はすべてドイツ文字で書かれている。巻末単語集の日本語はラテン文字のローマ字で書かれている。

### 第1巻の構成

葵文庫本に第1巻が2部あるが、図1にそのうちの一冊の扉の写真をあげる<sup>10</sup>。最下部に「1871年、明治3年」(im dritten Jahre Meidji, 1871.) と書かれている。2部とも誰かが鉛筆で書き込みをしていて、1871年を1870年に訂正したり、明治3年と書いてあるところに疑問符を付けたりしている。しかし、「1871年、明治3年」という組み合わせは、前書きにも書いたが、太陽暦を採用した明治6年以前なので、十分にあり得る組み合わせである。1871年とは明治3年11月11日から明治4年11月20日までだからである<sup>11</sup>。鉛筆の書き込みは後世のひとが旧暦と新暦の違いが分からなくなって、付けたものだろう。刊年の記述が正しいとすれば、第1巻は1871年刊行であるが、明治3年の11月11日から年末までの間に刊行されたことになる。なお、静岡県立中央図書館の検索情報ではどういふわけか、第1巻も第3巻も明治4年刊行という解釈をしている<sup>12</sup>。

第1巻の各章の見出しは次の通りであるが、2章だけが特殊で、見出しがなく文がすぐに始まっている。

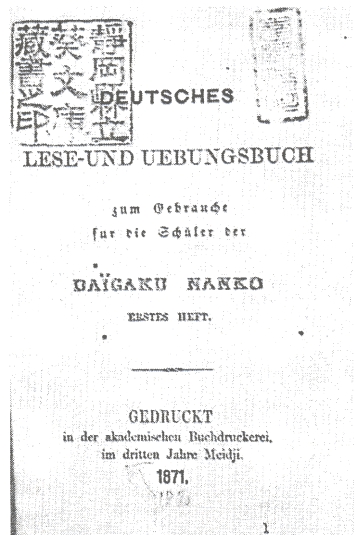


図1:『ドイツ語の読み物演習』第1巻の扉

- 1 . DER SPASZHAFTE RÄUBER
  - 2 . Kono h'to-wa hana-hada omoshiroki h'to nari.
  - 3 . KANE-MOTSI-TO TOSOKU
  - 4 . KLEINE GUTE GÄRTNER
  - 5 . TAISETS-NARU DOBUTS
  - 6 . DER GROBE VOGEL
  - 7 . HYAKSHO-TO KARASZ
  - 8 . DAS FERNROHR ODER TELESCOP
  - 9 . TOME GANE
  - 10 . DER ZERSTREUTE
  - 11 . TORI-MAGIRETA H'TO
  - 12 . DAS MIKROSKOP
  - 13 . DER GUTE SCHWIMMER
  - 14 . YOKU OYOGU H'TO
  - 15 . DIE STEINKOHLE
  - 16 . SEKTAN
- WOERTERVERZEICHNISZ

挿絵、図、表のたぐいは一切ない。ドイツ語の章と日本語の章が混在するが、ドイツ語の章に続いて日本語の抄訳が続くというのが基本になっているようだ。ただし、章によっては逐語訳に近い 11 章のような日本語訳もあるが、12 章ではまったく日本語訳が付いていない。対応する章の本文の行数を比べてみると逐語訳になっているのか、抄訳なのか、あるいは、ほとんど訳されていないのかが見当が付く。

第 1 巻の独文と日文の対応する章の本文の行数

|            | 読み物のテーマ        | ドイツ語の章 | 日本語の章 |
|------------|----------------|--------|-------|
| 1 章と 3 章   | 泥棒と金持ちの話       | 34 行   | 18 行  |
| 4 章と 5 章   | 小鳥の効用など        | 52 行   | 28 行  |
| 6 章と 7 章   | 物まね鳥と百姓の話      | 19 行   | 20 行  |
| 8 章と 9 章   | 望遠鏡と天文学について    | 92 行   | 27 行  |
| 10 章と 11 章 | ぼんやりした教授の話     | 29 行   | 22 行  |
| 12 章       | 顕微鏡と生物学について    | 115 行  | 無し    |
| 13 章と 14 章 | 水泳の上手な (?) 人の話 | 61 行   | 20 行  |
| 15 章と 16 章 | 石炭と炭鉱について      | 179 行  | 17 行  |

15章と16章では179行対17行で、日本語の分量が極めて少ない。15章は「石炭」という題であるが、石炭と炭鉱のことを詳しく書いている。日本語の抄訳が付かない12章は、「顕微鏡」という題で顕微鏡で可能になる生物学や微生物の研究についての話である。8章と9章の「望遠鏡と天文学についての章で、これも日本語訳が少ない。読み物のテーマを見れば分かるが、第1巻の読み物の特徴は文学読み物になっていない点である。国語の教科書に取られそうな話は「泥棒と金持ちの話」「物まね鳥と百姓の話」「ぼんやりした教授の話」「水泳の上手な(?)人の話」の四つぐらいで、他は、理系、工学系の読み物になっている。4章と5章の「小鳥の効用など」についての章は後で詳しくみるが、日本語が明らかな誤訳になっているし、5章の後半ではドイツ語の章にはないナメクジを食べるヒキガエルの効用が書かれ、4章のドイツ語の内容に自由に書き足したような構成になっている。

1章の抄訳に当たるのは3章で、2章は日本語文であるが、1章を元にした和文独訳用の文を書き連ねたものようである。pp.4-5の2章のローマ字日本語文の全体を以下に再現する。改行も含めてオリジナルを再現しているが、ハイフンはオリジナルでは「h'to - wa」のように見える印刷になっている場合があるが、今日普通のハイフンの打ち方に変えてある。

## 2. Kono h'to-wa hana-hada omoshiroki h'to nari.

Ano mori-ni hanahada tsuyoki tozoku sz'mau. Ta-kaki ki-no sh'ta-ni samush'ki yabu-ari. Heishi-ga te-ki-no mune-ni tan-suts-wo mukeshi. Kare-ga hanahada odorokishi. M'ma-ga todomarishi. Ano hako-no ts-kegi-wa yoku aru-ka? Mori-ni yuku-coto-no iki-oi aranu. Kono h'to-no tomodatsi-ga shinda; sore-yuye-ni hana-hada kanashinde-oru. Kono kizzeru-wo anata-no tamotto-ni o-ire nasai. Anata-no tokei-to watak'shi-no kin-no kusari-to tori-kai-masho-ka? Kono h'to-ga sh'o-sh'o gaikoku-ni samayotari. Anata dzubun tabe-mash'ta-ka? Anata-no tabakko-wo tsisaki hako arui-wa fukuro-nite motte-ori-mas-ka? Kotoshi Yoropa-ni oku-no ikusa-ga dekita. Kono sh'oku-nin-wo yatoi-nasaru-na; baka-jaro desz.



Shinki-no bugu-de wa toku utsz-coto-ga dekuru.  
Watak'shiga tomodatsi-ni monogatari-wo kikaszeshi-  
yuye, taiso warai-mash'ta. Shinki-no teppo-wa saki-  
kara komedz-ni moto-kara komerare-mas. Teki-ga  
mori-no naka-ni nigeta. Watak'shi-ga ano coto-wo  
kikishi-yuye, hanahada odorokishi. Itsu iye-ni kayero  
-to omoi-nasaru-ka?

一見すると、ひと続きの文章のようにも見えるが、「強き盗賊」(2行目)、「兵士」(3行目)、「敵」(2行目から3行目)、「この人の友達」(7行目)まで読んでもその間につながりは認められず、無関係の文を並べて一続きの文章のようにしていることが分かる。内容は1章の DER SPASZHAFTE RÄUBER (「おかしな盗賊」とは無関係ではないので、説明はまったくないし、他の章では同じような「文章」は作られていないのであるが、おそらく、和文独訳用の問題を作る意図があったのではないかと思われる。無関係の文を並べて一続きの文章のようにするのは、辞書の用例ならともかく、今日では異様に見えるが、『カデルリー文典』での文法説明の例文の示し方と同じである。たとえば従属の接続詞 (unterordnende Bindewörter) の用例が複数の段落に分けてあげられているが、一つの段落内の各文は、関連がありそうなものもあるが、意味的に無関連なものを、おそらく従属接続詞の意味的まとまりの上から一つにまとめて、一段落にしている。短かめの段落を以下にあげておく。

Das Holz schwimmt auf dem Wasser, weil ersteres leichter ist als letzteres. Alles hatte Bedauern mit diesem Unglücklichen, da er bei Allen beliebt war. Noch ist kein Grund zu Besorgung vorhanden, indem ja Alles noch zum Besten enden kann. Sie hoffen daß er Sie bezahlen werde — eitle Hoffnungen! (第2版復刻版, 1878, p.173, 「木は水に浮かぶ。前者が後者より軽いから。みんながこの不幸な男性のことをあわれがった。彼はみんなに人気があったから。心配する必要はまだない。すべてが結局うまく行く可能性があるのだから。彼が報酬を支払ってくれると期待しているようだが、期待しても無駄だよ」)。

したがって、この章の作成にはカデルリー自身が関わったかどうかは不明だが、

少なくともその影響下にあるように思われる。

各章には巻末に単語集が付いているが、幾つかの章には章末にも単語集を付けるという編集上の不手際が見られる。単語集の形式は、ドイツ語の章では、täglich - mai-nitsi のようにドイツ語の単語に日本語の訳語があてられ、日本語の章では、dobuts - Thier s. のように日本語の単語にドイツ語の訳語があてられている。この訳語の付け方から考えると、この教材が独文和訳と和文独訳の練習のためのもののように思われるかもしれない。しかし、そういう体裁は採っているものの、日本語の内容がほぼ逐語訳になっている章もあるので、独文和訳や和文独訳の解答が出ていることになり、独文和訳や和文独訳の練習用の教材だというもへんである。ほぼ逐語訳になっている部分があるところから考えて、自習用の対訳教材を作ろうとしたという意図を読み取ることも可能であるが、そうすると、対応する日本語がない章があったり、対応する日本語の章が抄訳になっていたり、しかもその抄訳がドイツ文の前半にしか対応していなかったりする章があるのがうまく説明できない。

結局、第1巻の教材の構成は、意図が不明確であり、日本語への訳読教材以外にどのように利用したのかははっきりしないと言える。

### 第3巻の構成

表紙や扉には題名は書かれていないが、本文の冒頭には Europa. Alte Geschichte. と書いてあり、ヨーロッパの古代史を扱っている。全24章からなるが、各章には見出しはない。章ごとにドイツ文字とラテン文字を交互に使っている。ラテン文字も勉強させようという意図が明確である。巻末単語集の他、年表が巻末に付いている。挿絵や地図のたぐいはまったくない。記述対象はいわゆる歴史時代以前の考古学の分野から西ローマ帝国崩壊までである。ラテン文字でドイツ語を書く場合の方式は、エスツェットを使わずに sz を使う点が独特であるが、ウムラウトの使用法も独特であり、ウムラウトを使わないのを原則にしているようである。使用しているのは2章

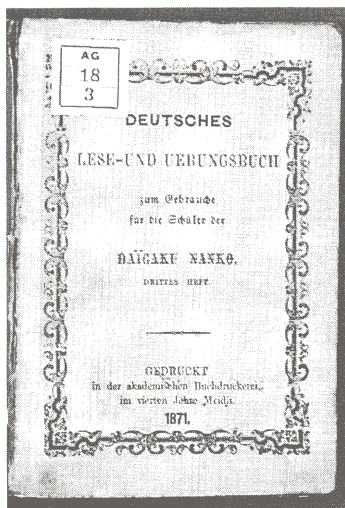


図2：第3巻の表紙、扉も同一内容。

と10章だけで、未使用が4章、6章、8章、12章、14章、16章、18章、20章、22章、24章となっている。ただし、10章ではウムラウトの使用は1回だけである。

内容についても簡単に見ておくと、本文の冒頭は「ヨーロッパはもっとも小さな大陸のひとつであるが、その狭小さにもかかわらずもっとも豊かで、強力で、もっとも人口が密集した大陸となっている」となっていて、本文の末尾が「偉大な西ローマ帝国の終焉によって中央ヨーロッパの諸民族の重要性がますます顕著になり、ヨーロッパの新しい歴史が始まった。おおよそ西暦500年ぐらいのことであり、つまり1,400年足らず前のことである。」となっている。

ドイツで出版された万国史（つまり世界史）の古代編などを参考にまとめられたものだと想像されるが、少なくとも完全な復刻版のようにはない。日本の事情に合わせて内容が書き換えられ、言わば日本版が作られていることは間違いないと考えられるからである。第3巻24章でも、西暦476年の西ローマ帝国の崩壊について触れているが、それは今から1,400年前だと述べている。書かれた1871年頃に合わせた計算をしていることが分かる。また、アジアとの関連を述べた箇所も目に付く。これも日本在住のお雇い外国人だからこそのような書き方になったのではないかと思われる。ドイツ人がドイツ人のためにヨーロッパ史を書くなら、日本やアジアのことに触れる必要性はそれほどないことは間違いない。いくつか内容をひろってみると、「中国のようなアジアの幾つかの国においては4,000年から5,000年前には文明がかなり発達した国家を形成していたが、現在のヨーロッパの主要国で文化の最初の始まり（die ersten Anfänge der Cultur）が見られたのは1,000年前から2,000年前に過ぎない。」

(p.1)。「野生のコメはインドの川岸に生育していて、インドで栽培されるようになった。4,000年前にはすでに中国にもたらされ、中国から日本に伝わったのである。ヒエ・アワ（Hirse）も同様である。」(pp.7-8)。「アジアで最古の文明が発達したが、ヨーロッパの中で最初に文明が発達したのは、アジアと気候が似ていてもっともアジアに隣接する地域だった。」(p.13)。「キリスト教の創設が極めて重要だったのは、東アジアにおける仏教が多く民族をつなげたことと同じであり、キリスト教はヨーロッパとアメリカにおいて同じ役割を果たしたのである。」(p.21)。著者の興味深いヨーロッパとアジアの比較は、自然科学の発達、未発達に関する指摘である。「建築物やモノはアジアでも非常に多くの美しいものが作られたし、アジアには文学や宗教の領域でもすぐれたものがあるが、古代ギリシア人に遅れをとっているのが自然の研究（das Studium der Natur）

である。天文学の領域での一部の例外はあるが、アジア人は過去に実験を行ったり、自然や自然現象を注意深く観察するというを行っていない。古代ギリシア人はアレクサンダー大王の時代には自然と真摯に向き合っていたし、解剖学、すなわち人体や動物の体についての研究や自然史 (Naturgeschichte) や物理学の研究はこの時代から始まっている。幾何学にしても今日でも古代ギリシアと似たようなやり方で教えられている。古代ギリシア人は力学の諸要素 (die Elemente der Mechanik) を定め、天文学的観察を後世に残している。」(p.26)。

## 2. 第3巻の著者はワグネルか

この章では、まず、編著者問題の容易な『ドイツ語の読み物と演習』第3巻について考えてみよう。第3巻は日本における最初期のドイツ語教材として題名や存在は過去にもとりあげられてきた (山岸 1939b:385, 宮永 1993:230, 2004:340)。しかし、第3巻の内容については詳しく触れたものはなく、鈴木 (1975:103-104) に「第一分冊、第三分冊ともにローマ活字でドイツ文を書き、その後にローマ字綴りで日本訳が記してあるが、ドイツ人の編集になったものか訳語がおかしい」とあるが、活字についても、日本訳についても記述が間違っている。第3巻の日本語は巻末単語集だけであるし、ドイツ文はドイツ文字とラテン文字を交互に使っている。じつは、田中 (1968:490) でも指摘されていることであるが、葵文庫本の第3巻には日本語で「ワク子ル 萬國史」という内容の貼り紙 (図3) がある。著者名と題名を表しているものと思われる。「ワク子ル」とは誰であろうか。この貼り紙はおそらく葵文庫側で付けたものだろう。なぜなら、幕末の徳川幕府旧蔵書にも複数の貼り紙がが付いていることがあるが、後から付けられた方の張り紙と赤字(「二百五十八番」と「独」が朱書きされている)と連番数字の形式が同じであるからだ。したがって、静岡学問所や葵文庫 (現在は蔵書の分類名であるが、かつては図書館のこともあった) などで統一的形式で貼り付けられた張り紙でないかと思われるので、「ワク子ル

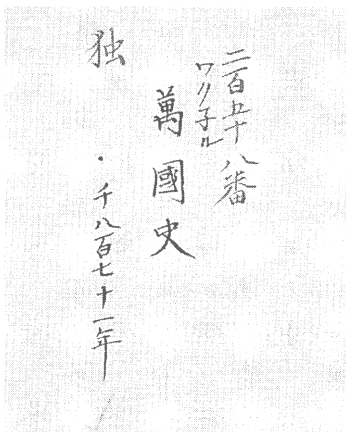


図3：葵文庫本第3巻の貼り紙、別の一冊では「二百五十七番」。

「萬國史」は出版側で付けたものではなく、確実な情報ではないということになる。おそらく、そのため田中（1968:490）では貼り紙の「ワクzul」についてそれ以上追求していないのかもしれない。田中は「ゴットフリート・ヴァゲネル」（田中の表記のワグネル）との関連については何も述べていない。しかし、何らかの確実な情報を葵文庫側が持っていたからこの題名と著者名を付けたのではないだろうか。インターネット上の古書店の連合体のZVAB (the largest online marketplace of German antiquarian books) で検索しても Wagner や Wagener の Weltgeschichte (「世界史」という教科書は見つからない。前章で詳しく述べたように内容が少なくとも日本版になっているので、ドイツの教科書をそのまま復刻したものではない。したがって、洋書調所時代の文久3年(1863)に日本人だけで H. Weiffenbach の Leitfaden zum Unterricht in der deutschen Sprache und Literatur (葵文庫 AG14) の文法部分だけを復刻印刷しているが(葵文庫 AG15)、ドイツ語の内容をまとめたり、書き換えたりということは当時の日本人教員には到底無理な話だろう<sup>13</sup>。となると、少なくとも教材のドイツ語の本文の著者は「ワクzul」という名前のお雇い外国人ということになるだろう。明治期のお雇い外国人についての膨大なデータを含む『資料御雇外国人』（ユネスコ東アジア文化研究センター編）には「ワグネル」と見出し語で表記される人物がひとりいるだけである<sup>14</sup>。ワグネル、つまり Gottfried Wagener である。現在ではワグネルがいちばん通用していると思うが、当時も様々な表記が見られたようである。寄田（1990）を見ると、残されている当時の文書には「ワグzul」と書かれたり、「ワクzul」と書かれたりしているようである。葵文庫本の貼り紙と同じ表記「ワクzul」が見られる文書も幾つかあるようだ。たとえば、ウィーン万国博覧会随行に際しての契約書が「ワクzul 条約書」になっているし、明治8年に内務省勸業寮に文部省との隔日勤務で雇用されたときの契約書がやはり「独逸人ワクzulヲ勸業寮開成学校両所へ雇入条約書」となっている。

お雇い外国人教師ワグネルについて書かれた文献は少なくないが、大学南校時代の記述はほとんどなく、ドイツ語教材を作成した事実などはどこにも書かれていないが、ワグネルが第3巻の著者であることを支持する言語的特徴が第3巻の本文に見られることについて述べておこう。ラテン文字で書かれている章には大文字のJをIに混同する間違いが見られるが、大文字のIとJの混同自体は幕末の日本最古のドイツ語教材『官版独逸単語篇』（1862）にも見られるが、その場合はIをJに混同している。大文字のJをIに混同する間違いは、ワグネ

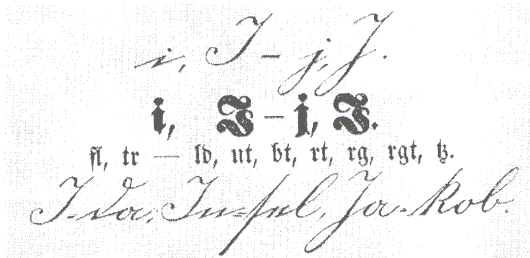


図4：区別されないドイツ文字の大文字のIとJ  
 (『ヘステル氏第一読本』から)

ルのラテン文字の筆記体を書く際の書き癖で説明できると思われる。

ドイツ語の場合 i と j の音価の差はもともと小さく、一方が母音で、一方が子音（半母音）という違いぐらいしかないとも言える。かつては索引などを付ける際にも同じ文字として扱われることもあり、i と j で始まる語の中で j で始まる語が i で始まる語の前に配置されるようなこともあったようである。おそらく、ドイツ文字の大文字の I と J で同じ文字が使われるというのも、ドイツ語での音の類似という事情を反映していたのであろう。しかし、小文字では区別することになっていたわけであるから、ドイツ語母語話者がドイツ語の単語の先頭が I なのか J なのか分からないということはある得ない。

ドイツ文字の大文字の I と J は同一文字であるが、字形はラテン文字の J に似ている。おそらく、そのため、幕末の洋書調所で刊行された『官版独逸単語篇』では、I の使われるはずのところでも J を書くという混同が起きているのだろう。図 5 のドイツ語の単語の場合、Jagdhund（「獵犬」）は正しく書かれているが、Jgel は Igel と書くべきところである。次の Jltis も Iltis（「ケナガイタチ」）と書くところである<sup>15</sup>。1870 年に大学南校で出された『ドイツ語の最初のレッスン』でも表紙に Jm Gebrauch（「使用中」）と Im と書くべきところを Jm と書いている。じつはワグネルが丁寧にラテン文字筆記体で書いた手書きの英語の文書「織物工業学校意見書」（榎本農商務大臣あて）が残されているが、『ワグネル先生追懐集』（以下『追懐集』と略す、1938）の謄写版（図 6）

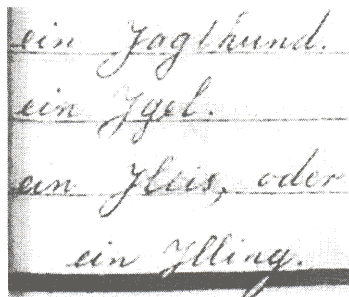


図5：日本最古のドイツ語教材『官版独逸単語篇』（1862）から

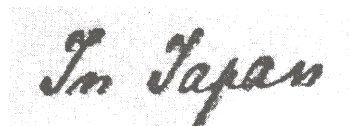


図6：ワグネルの手書きの  
 In Japan（英文）

を見ると、大文字の I と J を区別

していない。ドイツ語では英語の筆記体とはことなり、ラテン文字の筆記体の I と J は図 4 のドイツ文字の筆記体とほとんど同じ字形を今日でも使用している。図 6 のワグネルの筆記体は文字の下の基本線を下に突き抜けていないので、J ではなく I を書いていることになる。したがって、厳密にワグネルの文字を読み取れば、In Iapan となるはずである。ワグネルの書き癖である。おそらく、ドイツ語の原稿も同じような書き方だったのではないだろうか。もちろん、だからといって、ワグネルが I と J を区別できなかったということではないはずであるが、ワグネルの原稿をもとに文字を解釈した日本人には J を I と判断するひとが出てきてもおかしくない。第 3 巻のラテン文字で書かれた章で、Jahre や Jaharen を Jahre や Jahren とする間違いは合計 12 回生じている (14 章、16 章、18 章、20 章、22 章 2 回、24 章 6 回)。他にも Jahrhunderte (24 章)、Iedermann (8 章)、Ierusalem (22 章) といった J を I にする間違いがある。Iedermann (8 章) は例外だが、他はすべて 14 章以降で出現している。逆に I を J としてしまった誤りはすべて 12 章以前で起きている。Jn, Jm 10 回の内訳は、2 章 2 回、6 章 3 回、8 章 1 回、10 章 1 回、12 章 3 回である。Jtalien, Jtaliens とする間違いは 6 回あるがすべて 12 章で起きている。Jndien や Jnder とする間違いは 5 回だが、4 章 1 回、6 章 2 回、10 章 2 回になっている。他に Jnnere (2 章)、Jnnern (6 章)、Jndessen (4 章)、Jnseln (2 章) があつた。I を J にしてしまう間違いはすべて 12 章までに生じている。12 章までを担当する日本人と 14 章以降を担当する日本人が二人だったということだろうか。ワグネルの原稿を受け取ったあとの印刷に至る工程のどこかで起きた誤りだと考えられるから、印刷原稿の作成、植字、校正のすべての工程が行なわれていたかどうかは分からないが、いずれかの工程で起きた誤りであることは間違いないと思われる。これらの工程のどこかに二人の日本人がかかわっていたと推定される。

なお、上村 (1985b) で明治期の東京のドイツ語塾の使用教科書を開学明細書から抜き書きしているが、中島尚友塾のところに『ワグネル歴史』をあげている。宮永 (1993:333) でも中島

尚友塾で使われた教科書をあげているが、書名が『ワグネル万国史』となっていて、森鷗外も学習に使った可能性があるとして述べている。上村も宮永も『ワグネル歴史』や『ワグネル万国史』が大学南校で出版されたドイツ語教材である

Mit dem Aufhoeren des groszen westroemischen Reichs erhalten die mitteleuropaeischen Voelker immer groeszere Wichtigkeit; und es beginnt nun die neue Geschichte von Europa, seit etwa 500 Jahren nach Christi Gebart, oder vor kaum 1400 Jahren.

図 7 : 『ドイツ語の読み物と演習』第 3 巻末尾。Iahren と誤記されている。



とは述べていないし、著者のワグネルが誰であるかについてもなにも述べていないが、本稿で検討した結果から明らかだと思われるが、1871年刊行の大学南校のドイツ語教材『ドイツ語の読み物と演習』第3巻がそれであり、著者はゴットフリート・ワグネルであると考えられる。

### 3. 第1巻の編著者について

『東京帝国大学五十年史』(1932)に「外国教師」の任免等に関する表が掲載されているが(上冊第1巻第2篇補遺)、明治3年までに大学南校に採用されているドイツ語母語話者はカデルリーとワグネルしかいない。スイス出身の「ヤコツプ・カデルリー」は、受け持ち学科(「科目」の意味)がドイツ語で、明治3年1月から明治4年11月までの雇用期間とされている。ワグネルについては「ジー・ワグネル」とされ、ドイツ出身で、受け持ち学科はドイツ語、雇用期間は明治3年10月から明治10年2月になっている。

「外国教師」の任免等に関する表から明治4年中に採用されているドイツ語担当の他の外国教師を探すと次のひとたちがいる。出身国と採用開始時期と受け持ち学科を示す。

- a. ホルツ、ドイツ出身、明治4年1月、ドイツ語
- b. イー・クニツピング、ドイツ出身、明治4年9月<sup>16</sup>、ドイツ語、文学、数学
- c. カール・シエンク、ドイツ出身、明治4年11月、ドイツ語

しかし、第1巻の編著者の可能性があるのは、出版年が扉に書いてある通り明治3年であれば、編著者として可能性のあるのはカデルリーとワグネルに限られることになる。もう一人デーデルライン(デュデルライン, Ludwig Döderlein)というドイツ人お雇い教師がいるが、丸山(1936)では「明治初年来朝し、大学南校で独逸語を教授」となっていて、田中(1968:467)では1868年のところに「動物学者エルヴィン・ディーデルラインは来日して、大学南校でドイツ語を教えたが、また、帰国して、後にはシュトラースブルク大学の動物博物館長兼教授となった」としているが、丸山の「明治初年」を「明治元年」と取り違えたために起こった錯誤ではないかと思われる。動物学者のデーデルラインはインターネット上で生年等が確認できるが、1855年生まれだから大学南校で教えたとすれば十代で教えたことになってしまい、あり得ない。『資料御雇外国



人』(ユネスコ東アジア文化研究センター編)では、各種資料の採用開始年や雇用期間は一致していて、明治12年11月に東京大学医学部である。したがって、第1巻に関わることができた外国人教師はカデルリーかワグネルかのどちらかであることはゆるがないと思われる。

カデルリーは大学南校で最初にドイツ語を教えた外国人教師である。522ページの日本で最初の本格的ドイツ語教材『カデルリー文典』(1870)の編者である。大学南校のドイツ語教材で編者名が明記され、序文なども整えているのはこの本だけである。上村(1985a)はいわゆる『カデルリー文典』だけでなく、大学南校の他のドイツ語教材についても「明治三年(一八七〇)大学南校より三種のドイツ語学書が上梓されている。すべて同校生徒用にカデルリーが編纂したものと考えてよい」と述べている。また、カデルリーについては「国籍がスイスであるという以外、生没年をはじめその経歴はほとんど知られていない」と書き、「彼の生涯とくに来日前、帰国後の動静については全く知られていない」とも書いている。インターネット上のHistorisches Lexikon der Schweiz(e-HLS<sup>17</sup>)で調べると、あっけなく、Jakob Kaderli<sup>18</sup>として見つかった。事典上の記載をもとに彼の生涯を簡単にまとめておこう。1827年7月22日にスイスのベルン県のリムパハ村<sup>19</sup>(Limpach)で生まれ、1874年12月31日にマルセイユで死去。村の学校(Dorfschule)を卒業してから、農家で下働きをして、その後スイス軍に入隊し、ナポリに行く。物覚えが早く、語学の才能もあり(rasche Auffassungsgabe und Sprachtalent)、ナポリで家庭教師の職を得る。その後、クリミア戦争でフランス軍で働いたのちにサンクト・ペーターズブルクやワルシャワに行き、1860年にはイギリス、スコットランド、アイルランドを旅行し、1861年から1868年にかけてシベリアを旅行し、1868年から1872年に中国と日本を探検し(erkunden)、日本を出国した後は、1872年から1874年にアメリカとカナダを旅行し、ヨーロッパに帰国のためにニューファンドランド島、グリーンランド、アイスランドを旅行中に発病し、旅行を1874年に中断した。フランスのマルセイユで12年に渡る世界旅行(シベリア旅行からのものだろうか)についての回想記を執筆し始めるが、途中で病没。シベリアでは鉱山学校(Bergbau-Akademie)にも通つたらしいことが事典に書かれているが、どうやら、それほど教育は受けずに、「物覚えが早く、語学の才能もあり」ということで大学南校で最初のお雇いドイツ語教師にまでなり、総ページ数522ページの『カデルリー文典』を書き上げたようだ。事典の記載には日本でドイツ語教師をしていたことは書かれていないが、大学南校の3人めのドイツ語のお雇

い外国人教師<sup>20</sup>であるクニッピングの未刊文書を翻訳した『クニッピングの明治日本回想記』（小関／北村 1991）の記述「やがて、われらがスイス人カデルリが家庭教師（Hauslehrer）としてシベリア経由で来日した」の記述とも一致し、本人に間違いないと思われる。

一方のワグネルは明治のお雇い外国人の中でも日本への貢献という点では際立っている人物であり、佐賀県では有田焼きの改良に従事し、上京後は、大学南校、大学東校の教育にあたった。その後、国策として当時重要だった博覧会事業に協力し、ウィーン万博やフィラデルフィア万博、内国勸業博覧会などで日本の殖産興業政策に貢献している。後に京都舎密局で働くことになるが、島津製作所の創立者の初代島津源蔵に大きく影響を与えている。「島津製作所は明治八年、科学立国を担う教育用理化学機械製造業として産声をあげた。創業者島津源蔵は、店の前にある舎密局に出入りし、ワグネルの弟子としてさまざまな機械を生み出していく」（荒俣 1991：94）。その後、東京工大の前身の東京職工学校（東京工業大学の前身）や東京大学でも教育・研究を続け、1892年に東京で亡くなっている。ワグネルの大学南校への着任の時期については、東京工業大学の敷地内にタイムカプセルとして埋められている陶管記載の略伝<sup>21</sup>も間違っていて、「同四年鍋島藩ヲ辞シテ入京シ理化学ヲ大学東校及南校ニ講ス」（1937年12月）と書いているし、他にも間違った記述が流布したせい<sup>22</sup>、着任を明治4年だとするものがいまだにある（田中 1968：487、吉田 1968：76）。『日本近現代人名辞典』（吉川弘文館、2001）でも「明治元年（一八六八）来日、同三年佐賀藩に招かれ、有田焼の改良に従事。翌年上京、大学南校、同東校（東京大学の前身）の御雇教師となる。」としている。明治4年説が間違っていることは『東京帝国大学五十年史』だけでなく、最近の詳細な研究に基づく『資料御雇外国人』（ユネスコ東アジア文化研究センター編）や公文書を調査した寄田（1989, 1990）などで明らかであり、ワグネルの大学南校での雇用期間は明治3年10月からである。

教材の編著者問題がカデルリーか、ワグネルかという二者択一の問題と考えるなら、教材の中身を検討すれば、答えを出すのはそれほど難しくはないと思われる。カデルリーは『カデルリー文典』との比較ができるし、ワグネルの場合は日本への貢献の大きなドイツ人だったので、伝記も残されているし、ワグネルの書いたドイツ語論文や手書きの手紙なども残されている。また、既に見たように『ドイツ語の読み物と演習』第3巻はワグネルの著作と考えられるので、これらをもとに第1巻の編著者を推定することは十分可能だと思われる。

カデルリーではなくワグネルが第1巻の編著者だとする解釈を支持するのは以下のような点である。

- a. 第3巻と同一題名の同一のシリーズの教材だということ
- b. 日本語が使用されていること
- c. ラテン文字とドイツ文字の両方が使用されていること
- d. 自然科学や鉱山学の入門読み物が含まれるということ
- e. 編著者名が書いてないということ
- f. ドイツ文字でのBの使用法

第3巻がワグネルの著作であるなら、第1巻も同一の題名、同一の体裁でつくられている教材であるから、第1巻もワグネルが中心になって作成したものと考えるのがいちおう自然な解釈であろう。同一の体裁ということでは、扉にある「明治」のローマ字表記もそうであるが、第1巻と第3巻はともに Meidji と表記されている。「明治」の表記の仕方は、『カデルリー文典』では Meidschi と書かれている点でことなっている。この表記の仕方の違いは、さらに調べてみると、「明治」の表記だけでなく、第3巻のローマ字で書かれた日本語の単語で dj は何度も使われているが、dsch はまったく使われていない。第1巻でもローマ字で dsch は一例もない。

『ドイツ語の読み物と演習』ではローマ字の日本語が使われているので、少なくとも日本語の聞き取りがある程度はできるドイツ語母語話者でないといけないが、カデルリーが日本語ができたということはこれまでのところ知られていないようであるし、『カデルリー文典』では、タイトルのところの「明治」と「大学南校」のローマ字以外、日本語がまったく使われていない。カデルリーが日本語ができなかったとすると、カデルリーには第1巻の作成で重要な役割は果たせなかったはずである。日本人教員がドイツ語を日本語への翻訳を担当し、その日本語のローマ字化を外国人教師が行なったのかもしれないが、日本語のある程度の知識がなければ、日本語はほとんど聞き取れないのではないだろうか。ワグネルの場合は日本語が出来たと言われていて、後年は講演も日本語でこなしている。『独逸東亜細亜研究協会報告』第6巻第57号(1896)に発表された略伝の邦訳が『追懐集』に収められているが、ワグネルはパリ中央電信局で仕事を得たときに、「勤勉と図抜けた才能を現わし短期間の間に教師にもつかず只文法書と字引とをたよりにして電信に用いられるすべての国語をフラ

ンス語に翻訳し得るようになった。[...]かくして氏は信じられぬ程短時日月の間にイタリー語スペイン語英語オランダ語及デンマルク語を覚え之等の言葉で書かれた新聞を楽楽と早く読みこなし得るに至った。」(p.154)。お世辞や誇張もあるだろうから文字通りに理解するわけには行かないと思うが、語学的才能に恵まれていたらしいことは事実だろう。明治5年に商法学校設立の計画が文部省にあったが、ワグネルについて「日本語ニモ相通候ニ付、同人ヲ以テ教師ト仕度」<sup>23</sup>という伺いが出されている。

『カデルリー文典』は基本的にドイツ文字で書かれ、外来語系の文法用語の Präsens (「現在形」) などしかラテン文字が使われていない。『ドイツ語の読み物と演習』の第1巻では、ドイツ語は基本的にはドイツ文字で書かれているが、各章の題はラテン文字であるし、日本語がすべてラテン文字で書かれている。ラテン文字も使うという方針で編集されている点がワグネルの書いた第3巻と共通している。『カデルリー文典』と『ドイツ語の読み物と演習』第1巻ではラテン文字の使用に関する編集方針が異なっている。

第1巻の特徴になっている理工学分野の入門的読み物はワグネルには編集できる内容だと思われるが、カデルリーにはできなかった可能性がある。『カデルリー文典』の後半にも読み物が付いているが、いわゆる文学系の読み物に限られている。その点では、ワグネルはゲッチング大学において数学と自然科学でギムナジウム教員の資格をとっているし、同じゲッチング大学で物理学と数学の分野で博士号もとっているので、理工学的な内容の教材を作成することができてもおかしくない。

編著者名については、大学南校で出版されたドイツ語教材で著者や編者の名前が書いてあるのは『カデルリー文典』だけであるが、これはカデルリーが著作権意識の強いひとだったことが関係していると思われる。実際、1870年刊の522ページの『カデルリー文典』の第2版が版の大きさも変え、文法の部分だけを192ページにしたものがカデルリーに無断で1872年に出版されているが、これに対してカデルリーは外務省に抗議し、外務省が文部省に照会し、文部省が南校に問い合わせている件が山岸(1939b)に紹介されている。ベルヌ条約加盟にあわせて日本で著作権法が制定されたのは明治32年(1899)のことであるから、それ以前で著作権のようなものに対する意識が極めて希薄だったと思われるが、南校も返答に苦慮したことが南校文書から分かるようである。もっとも、カデルリーが抗議した理由は本人の言い分が分からないので、正確なところは分からないが、抗議を受けた外務省が文部省へ問い合わせしている文面を見る

と、「過半不具之儘ニテ」という言葉があるので、初版の間違いが直されないで出版されている点も気になったのかもしれない。いずれにしても、著作権意識の強いカデルリーが本書の編著者であったら、本書にもカデルリーの名前が印刷されていたのではないかと思う。

ドイツ文字でドイツ語を書く際の *B* の使い方が『カデルリー文典』では独特である。複数の書き方をしている場合もあり、規則的に使い分けをしていない点はあるが、*laßen* や *müßen* や *eßen* や *freßen*, や *gegeben* や *vergeben* などの短母音に挟まれている *B* を頻繁に使用しているが、このような使い方は『ドイツ語の読み物と演習』第1巻ではなされず、*fressen* (第1巻4章本文) や *müssen* (第1巻12章本文) のようになっている。カデルリー的な書き方ではないと言える。

しかし、表記のくせを細かく検討してみると、第1巻の全体を通してカデルリーが関わったということは、やはり、否定されると思われるが、第1巻の一部でカデルリーが教材作成に関係していることもありうると思われる。カデルリーが関係しているとすると、第1章や第1章をもとに構成されている第2章、第3章が可能性が高いと思われる。なぜなら、『カデルリー文典』では不定代名詞の *etwas* や *nichts* を大文字で書いているが、その特徴が第1巻1章のドイツ語にだけ見られるからである。この *etwas* や *nichts* の大文字書きは本来間違いではなく、当時のドイツ語の文法規則としては正しかったものかもしれない。明治初期のドイツ語教材として日本でもおおいに使用されることになった『シェーフェル氏文法』(*Leitfaden beim Unterrichte in der deutschen Sprache für die unteren Classen höherer Lehranstalten von Edmund Schäfer*)でもそのように説明しているからだ。わたしが見た版は1868年にケルンで出版された第7版であるが、*Etwas* と *Nichts* の用法を名詞的な場合 (*als Dingwörter*) と形容詞的な場合 (*als Eigenschaftswörter*) に分け、名詞的な場合には大文字で書き、形容詞的な場合には小文字で書くというルールを説明している。形容詞的な場合というのは *nichts Gutes* や *etwas Neues* のような使い方を指している。第1巻1章では *Etwas* と *Nichts* が大文字で書かれている。

- a. Jetzt werde ich Dir Etwas sagen [...]
- b. Jetzt habe ich Nichts mehr, als dieses Pistol [...]

巻末単語集でも *Etwas - aru-mono* や *Nichts - nandemo (nai)* となっている。*etwas* については1章以外の第1巻に3回使われているがすべて小文字で書いてあるが名詞的の用法と言えるものはない。*nichts* については1章以外の本文には出て来ないが、第1巻7章の巻末単語集には小文字の *nichts* が出てきている。*iku-mo - nichts mehr* と *nakarishi - nichts* である。第3巻では *etwas* は本文では副詞用法の *etwas später* だけだが、巻末単語集には名詞的な *etwas* が出てくるが、すべて小文字で書かれている。*zu etwas verhelfen - fugo-sz'ru* と *etwas durchsetzen - hoka-no h'to-ni sakote okonau* と *auf etwas stoßen - deau* である。*nichts* はワグネルの書いた第3巻に2例出てくるが、1例は形容詞的の用法の *nichts anderes* であるが、目的語として *nichts* が使われている *Hannibal hatte waehrend dieser Zeit nichts unternemen koennen, [...]* (第3巻16章) では小文字で書かれていて、ワグネルは *nichts* を名詞的の用法であっても小文字で書いたようだ。これは第1巻1章の書き方とは異なっている。

#### 4. 日本人(教員)との協力関係はどうだったのか

日本人教員との協力関係を教材の言語的特徴から推測してみよう。『ドイツ語の読み物と演習』についてこれまで先行研究で日本人教員が教材作成に関わっている可能性について述べたものはない。外国人教師の関わりだけが注目されてきている。鈴木(1975:104)は、第1巻についてであるが、「ドイツ人の編集になったものか訳語がおかしい」としているし、上村(1985a)では「すべて同校生徒用にカデルリーが編集したもの」と書いている。それでは、日本人教員は作成にまったく参加していないのだろうか。

外国人教師の教材作成への関与を支持する事例を最初にあげてみよう。

- a. 日本の実情に合わせた内容
- b. 日本語として間違っている語形
- c. ローマ字の *j* と *y* の誤用

ドイツ語の文章が日本の実情に合わせた内容になっている箇所が第1巻にはあり、ドイツ語の内容の書き換えは当時の日本人教員にも無理だったと思われる。たとえば8章には *Fusi-yama* (「富士山」) から地平線までがおおよそ 64 *Japanesische Meilen* (「64里」) になることが書かれているが、ドイツで出版された本にあった文章であればこのような記載はありえない。15章でも日本式マイルとしての

「里」が使われている。8章や15章はお雇い外国人教師が日本で書いたか、書き直したものであることは間違いないと見てよいだろう。第3巻にしても既存の歴史教科書を縮めてまとめたもののだとしても、少なくとも日本版が作成されており、当時の日本人教員では作成できなかっただろうと考えられる。

また、日本語に見られる語形の違いなどは日本人が間違えたと考えるよりはドイツ語母語話者の間違いと考えられるだろう。外国人教師の間違いと考えられる特徴が見られることは確かである。

第1巻8章単語集で *hell - akiraki, dunkel - kuraki* となっているが、9章の抄訳でも *akiraki-to kuraki' tokoro miyuredomo* となっているので、*akiraki* は誤植ではありえない。ドイツ語母語話者が類推によって *kuraki* と同じ末尾形式の形容詞を「明るき」から作ってしまった間違いだろう。単語集だけでなく、日本文の方でも *akiraki* が出てきているのは、ローマ字化を外国人教師が担当したためではないだろうか。*arayeru* (第1巻:1章単語集、15章単語集) も「あらゆる」であろうから、*eru* という音形が日本語では動詞で頻繁に出てくることなどから外国人が類推して間違えた可能性がある。

ローマ字の *j* と *y* を入れ替えたことで起きる誤用も第1巻のローマ字日本語文に観察される。『ドイツ語の読み物と演習』のローマ字ではヤ行子音を書くのに *y* を使うのを原則としているが、ときに *baka-jaro* (「馬鹿野郎」) のように *j* も使われている。これはもちろんドイツ語では *j* がヤ行子音に対応しているためである。ところが、*y* を使った日本語としては意味不明の語がいくつも見つかる。ドイツ語で「100フィートほどの高さの山」と書いてあるところに対応するローマ字日本語文が *takasa yu-djo-no yama* (第1巻9章本文) となっている。*yu-djo* が日本語として意味不明であるが、ドイツ語文の意味から考えると「高さ10丈の山」のはずである。とすれば、この間違いは *ju-djo* と書いてあったローマ字を後から日本語の発音の分からないドイツ語母語話者が *j* をドイツ語のように読んで「ユウジョウ」と解釈し、それを *yu-djo* と書き直したのではないだろうか。ローマ字の *j* の解釈がかかっているとすると、一般的な問題なので、同種の違いが他にもあるはずだが、実際、幾つか見つかるようだ。「上弦下弦」と思われるところを *yogen-kagen* (第1巻9章本文および単語集)、「上手」に *yodz* (第1巻6章単語集)、「蒸気機械」に *yoki-kikai* (第1巻16章本文) と書いてある。途中段階のローマ字は『和英語林集成』を調べて書き留めてあったものかもしれないし、以前に日本人から聞いておいた内容のローマ字の発音が分からなくなってこう書いてしまったものかもしれないし、あるいは、日本人がロー

マ字の下書きを作成したのかもしれない。いずれにしても、最終的にドイツ語母語話者でなければ不可能な間違いである。

発音する日本人の関与も前提としているが、外国人が聞き取りを行なっていると考えられるような言語的な特徴も日本語のローマ字表記に見られる。

- d. 聞き取りミス
- e. 不安定な促音表記
- f. ヤ行子音に母音字の i を使う表記

単純な聞き取りミスも幾つか指摘できる。senzei「先生」(第1巻11章、2回)は、z をドイツ語式に読むかどうかで発音が変わるが、「せんぜい」か「せんつえい」だろうか。同じ第1巻11章本文に muszkash'ki gimon や mus'kash'ku-aranu が出てくるが、「むずかしい」を聞き誤ったものかもしれない。ただし、「むずかしい」が現代でもインターネット上でわりと見つかるのは口語でこの語形を使うひとがいたりするためであろうが、当時もそのような発音をする日本人があったかもしれない。wählen - eramu (第3巻7章単語集)では同一調音点で鼻音と閉鎖音を聞き誤った m と b の混同の例で、「選ぶ」である。d と r の聞き取りミスも両音の日本語での発音の仕方が似ていることも原因にあるだろう。zahlreich - obitarash'ku (第1巻4章単語集)のように「おびたたく」が「おびたらしく」と表記されているのはそのためである。他の類例も幾つかあげておく。komisch - omashiraki (第1巻10章単語集、「面白き」)、Kriegsdienst leisten - ikusa-no-sztome szeru (第3巻16章単語集、「勤め」)、einen Kampf bestehen - ikusa-wo itomu (第3巻17章単語集、「挑む」)、Verschwendung w. zan-zai (第3巻19章単語集、「散財」)。

促音表記が多用されていて、しかも促音表記が不安定で、表記がなされない場合も見受けられる。促音表記の多用自体は江戸語の特徴でもあったし、口語で促音が出てきてもおかしくないだろう。「少し」を「すこっし」skossi (第1巻5章本文および単語集)と表記しているし、attataka-ni (第1巻15章単語集)では「暖かに」を「あったたかに」としているのは口語的な言い方を聞き取った可能性がある。しかし、「植民地」の意味の語に対して「しょっくみん」と書いている Colonie w. - shiokkumin (第3巻6章単語集)はドイツ語母語話者の聞き誤りだろう。national - djikkoku-no (第3巻15章単語集)は「自国の」の意味と考えられるから、「じっこく」と聞き誤ったものだろう。Tasche w. -



tamoto (第1巻1章単語集)も同様であり、第1巻2章でも *Kono kiszeru-wo anata-no tamotto-ni o-ire nasai.* としている。ポケットのことを「袂」としているわけだが、「たもつ」と不要な促音表記をしている。促音の使用過多の例をもう少しあげておくと、*Gärtner m. - uyek'kiya* (第1巻4章単語集、「植木屋」)、*meatte - Grund m.* (第1巻5章単語集、「目当て」)、*Axe w. - djik'ku* (第1巻8章単語集、「軸」)、*benutzen - mottomeru* (第1巻15章単語集、「求める」?)、*ziemlich - taitte* (第1巻15章単語集、「大抵」?) などがある。反対に促音が期待されるところで促音表記がなされていない語も見つかる。第1巻の4章単語集と12章単語集で「学校」のことを *gako* と表記している。同様に *kesh'te* (第1巻9章本文) では、母音の無声化表記にはこだわらずに仮名表記すると、「決して」が「けして」になっている。*tasz'ru* (第3巻19章単語集) では「達する」を「たする」と表記しているし、*utayeru* (第3巻21章単語集) も「訴える」が「うたえる」となってしまう。促音が期待されるところで促音の表記をしていないのは、促音に慣れないドイツ語母語話者が聞き取りの際に聞き誤ったものだと考えられよう。もう一つ、外国人教師の教材作成への関与をしめすローマ字をあげると、Tokio のようなローマ字がある。日本語のヤ行子音を聞き取らない傾向、あるいはヤ行子音を母音の *i* で聞き取る傾向と言えると思われるが、ドイツ語母語話者の聞き取りの傾向をしめすものと思われる。*ts'iodo* (第1巻9章) は「ちょうど」であるし、「部屋」を *heia* と書いている。*Kono heia-wa shokumots-no kura-nite nomi-mono ooku ari.* (第1巻14章)。他にも第1巻単語集で2回 *heia* が使われている(10章, 14章)。「ひよどり」は第1巻7章の本文と単語集で合計4回使われているが、すべて *hiodori* と表記している。

さて、それでは、日本人が積極的に協力したことを示すような言語的特徴はないだろうか。教材作成者としての日本人(教員)の存在を支持する言語的な特徴である。

- g. 大文字の I と J の混同 (ラテン文字表記独文)
- h. ドイツ語の知識不足による誤訳
- i. 方言の混入
- j. ヘボンやパジェスの辞書になかった訳語の使用

大文字の I と J の混同は2章で述べた通りである。ドイツ文字では大文字の I

とJを同じ文字を使用するというのも原因になっていると思われるが、ドイツ語母語話者であれば、Italien の語頭がjではなくiであるという知識はitalienischのように形容詞は小文字書きもするわけで、当然持ち合わせているはずの知識だろう。

ドイツ語の知識の欠如に由来するような誤訳の場合も日本人の関与があるはずである。第1巻5章の例がはっきりしている。Aru gak'sha-no shirabetaru-ni go-wa ko-no aru tori-no szu-wa mai-nitsi 7500 shak'tori-mushi-wo toru。「ある学者の調べたるに五羽子のある鳥の巢は、毎日、7500、尺取虫を取る。」となるが、毎日7,500匹というのはあまりにも多すぎないだろうか。対応する4章の独文にはそんなことは書いてない。[...] jedes frifzt täglich ungefähr 50 Raupen [...] («どのひなも毎日約50匹の蝶や蛾の幼虫を食べる」)。Die Jungen bleiben etwa 30 Tage im Neste; in dieser Zeit können sie also 7500 Raupen fressen. («ひなは大体30日巢に留まり、したがって、(五羽のひなはこのあいだに7,500匹の蝶や蛾の幼虫を食べる(ことができる)」。独文の内容は、したがって、毎日7,500匹ではなく、30日で7,500匹なのである。この種の誤訳はドイツ語の意味が取れていないための誤訳なので、ドイツ語母語話者のものではあり得ない。独文の意味がとれなかった日本人が強引に訳したものと考えられる。ちなみに、5章を担当した日本人(教員)は豪傑だったのか、ドイツ文には書いてない内容もかなり書き足している。他の章には見られない特徴であるし、日文が自由に想像で書けるというのもこの「訳」がドイツ語母語話者ではないことを示唆している。

もう一つ例をあげると、Ein solcher Vogel befand sich in Dresden in dem Thiergarten, woviele ausländische Thiere gehalten und ernährt werden. は第1巻6章にある文であるが、ドレスデンの動物園にひとの話を口まねするカラスの仲間の鳥がいたという内容である。これを7章では、Dresden-no matsi-ni kono tori ari-shi. と訳している。動物園という言葉<sup>24</sup>や動物園という概念が当時一般的でなかったこともあると思うが、ドイツ語の意味の分かっているドイツ語母語話者ならこのような翻訳はしないのではないだろうか。ドイツ語文の言い方が日本語では不可能な同一種類の場所表現を重ねる言い方で、「ドレスデンに動物園にいた」という言い方になっていて、それも分かりにくかったのかもしれないが、ドレスデンの動物園にいたというのとドレスデンにいたというのでは情報がかなり違ってしまふ。日本で最初の動物園は上野動物園で、1882年(明治15)に開園している。当時の大学南校の日本人教員には Thiergarten

の意味がよく分からなかったのではないだろうか。独蘭辞典と蘭日辞典を使うことを考えても、意味は調べられなかったのではないだろうか。オランダ語の *diergaarde* や *dierentuin* を江戸時代の蘭和辞典『訳鑑』で調べてもどちらも記載はない。

Schachtel を *tsisaki hako* (「小さき箱」) の意味としているのも、ドイツ語母語話者ではあり得ない誤訳だろう。箱は大きくても小さくても Schachtel であり、*el* を小さなものを表す語尾と誤解した結果の訳語が「小さき箱」だからだ。同じように、*politische Einrichtung w. - seidji-no-ho* (第3巻5章単語集) では *Einrichtung* (「施設」) を *Richtung* (「方向」) と間違えて訳語を付けているが、ドイツ語母語話者であれば、*Einrichtung* が *Richtung* ではないことは当たり前のことなので、このような訳語は付けなかつただろう。

日本語に方言が使われているが、当時の外国人教師が日本語の方言まで使えた可能性は少ないのではないだろうか。たとえば、物まね鳥に馬鹿にされた百姓の話が1巻7章に出てくるが、引用符の間違<sup>26</sup>は訂正して示すと、*Hyakusho kotayete „Kore, sono kago-no uchi-ni iru burei-na mono-jo washi-wo bakajaro-to shaberu-ga; washi-wa sore-wo sz'kanuzo“ to ii-shi.* となる。「わしを馬鹿野郎としゃべるが」とあるが、*shaberu* をどういう意味で使っているのだろうか。巻末単語集に *shaberu - schimpfen* とされているから、「しゃべる」を「叱る」のような意味で使っていることが分かる。明治期にまとめられた近代的国語辞典の創始である大槻文彦の『言海』でもそんな意味は採られていない。これは方言の可能性があるようだ。『全国方言辞典』(東條操、東京堂、1951)によると、「しゃべる」を「譴責する」の意味で使う地域として愛知県海部郡をあげている。しかし、『和英語林集成』(初版)では、*To talk much and annoyingly, to prate, tattle, chatter.* であり、「叱る」という意味は記述していない。パジェスの『日仏辞書』でも同様で *Parler beaucoup, babiller, caqueter* と「多弁・駄弁」と記述しているだけである。ヘボンにもパジェスにもない使い方なので、日本人の協力がなかったら、外国人教師には日本文の文章中の *shaberu* が使えたはずがないし、単語集の *shaberu - schimpfen* という翻訳も出て来ないはずである。他にも、「せ」に「しえ」を使い、「おりましえぬ」と言っている例 *senzei-wa utsi-ni ori-mashenu* (第1巻11章本文) や「はなしえし」と言っている例 *aru-tomodatsi-ni deaite, sono nangi-wo hanasheshi* (第1巻11章本文)、「つげしらしえ」と言っている例 *tsugeshirashe* (第3巻1章単語集、「告げ知らせ」)と言っている例などがあるが、1603年の『日葡辞書』で記述されている日本語

のサ行が「さ・し・す・しゅ・そ」であることから分かるように京都では古い発音の仕方に対応し、方言としての言い方として当時も残っていたものを書きとめたものではないだろうか。また、adzumaritaru (第1巻9章本文)や tadskeru-mono (第1巻4章単語集、「助ける者」と書いているが、たとえば東北方言を使う日本人ならありうる言い方だと思われる。もう一つはっきりした方言が使われている例が Eidechse w. - to-kaki (第1巻15章単語集)である。トカゲのことを「とかき」と言う地域があるのは早くから知られていて、18世紀の方言辞典『物類称呼』(越谷吾山著)に「とかけ」は大和では「とかき」となることの記載があり、江戸では「とかけ」の「け」を濁らせて「とかげ」と呼ぶと書かれている。東條操編の『全国方言辞典』は「とかき」の使用地域として、三重県南牟婁郡と愛媛県伊予郡をあげている。

日本語に方言が見られることは日本人が関与したことの証拠にはなると思われるが、日本人教員の発音をもとにしたものかどうかは不明である。日本人教員ではなく、日本人学生が教材作成に関与した可能性もあるかもしれない。なぜなら、明治3年当時に大学南校の教員であったことがはっきりしているのは川上正光(蜂次<sup>26</sup>、峯次<sup>27</sup>)であり、相原重政(升二郎<sup>28</sup>)も可能性があると思われるが、獨協学園百年史編纂室編の「獨逸学協会会員名簿」<sup>29</sup>で調べると、二人とも東京出身となっているからである。shitsyo-sz'ru (第3巻2章単語集)なら「必要する」を「しつようする」と書いていて、東京出身者の方言的特徴であるが、上にあげた他の方言的表現の場合は東京出身の川上や相原が使ったとは思えない。

第1巻にしても第3巻にしても日本語が関係している本文や巻末単語集は『和英語林集成』(初版)を利用したことが間違いないと思われる。第1巻でも第3巻でもア行のエを ye と書くローマ字が使われているが、これは『和英語林集成』(初版)と同じである。ヘボンが初版の序文で参考書として『日葡辞書』とメドハーストの『英和・和英語彙』をあげているが、エにはすべて ye を使うというのは『日葡辞書』の方式であるから、ヘボンは日葡辞書の方式にならったようである<sup>30</sup>。

また、ヘボンは初版ではいわゆるヘボン式ローマ字と言われるものとはかなり異なるローマ字を使用している。特徴的なのは母音の無声化や省略を母音なしで記述する点にある。たとえば、「菓」はヘボンで kuszri と書かれ、第1巻12章単語集で kusz'ri と書かれている。「穀物」はヘボンで koku-motsz と書かれ、第3巻3章単語集で kokumots と書かれている。さらに、もう一つ、『ドイツ語

の読み物と演習』のローマ字がヘボンの『和英語林集成』(初版)から影響を受けている証拠を示すと、第3巻のローマ字には奇妙な w を使ったローマ字が出てきている。verehren - wyamau(第3巻6章単語集、「敬う」)、Verehrung w. - wyamai(第3巻21章単語集、「敬い」)、Ehrfurcht w. - wyamai(第3巻22章単語集、「敬い」)である。なぜ u ではなく、w なのか。ヘボンでは再版以降訂正されているが、初版では、wi というローマ字が紛れ込んでいる。wiyamau、wiyamai と書いている。「飢え」も wiye だし、「植える」も wiyeru である。ヘボンをもとに妥当な表記を考え、ヘボンの表記から i を落として作成した語形が wyamau や wyamai になったのだと考えることができるだろう。

したがって、『和英語林集成』が『ドイツ語の読み物と演習』の作成に利用されたことは間違いないと思うが、しかし、単語集の日本語を詳しく見当してみると、『和英語林集成』(初版、1867)やパジェスの『日仏辞書』(1868)にもない訳語が使われている場合がある。これは日本人が訳したか、手伝ったことの証拠であろう。überhaupt - ippani'kono / wake-de(第3巻19章単語集)。「いっばにこの訳で」となり聞き取りミスがあるようだが、「一般」のことだろう。じつは第3巻の巻末単語集では訳語に「一般」だと思われる語が他にも2箇所使われている。im Allgemeinen - tsure-ni, ippan-ni(第3巻3章単語集)、gemeinschaftlich - majiwariai-no, ippan no(第3巻3章単語集)。この「一般」という語は明治の新語である。『明治のことば辞典』(惣郷正明、飛田良文編、東京堂、1986)で詳しく調べられているが、明治初年から各種辞書で採用されているが、『和英語林集成』では明治5年の再版からの採用である。ということは、ワグネルがパジェスの『日仏辞書』やヘボンの『和英語林集成』を調べても分かるはずのない語だったことになるだろう。同様に、「公会」を「議会」の意味で使うのも文久2年の『英和対訳袖珍辞書』からであるが、『和英語林集成』では明治19年の第三版でようやく採用されている。したがって、Parlament - kokai(第3巻8章単語集)のように訳してあるのは、日本人教員などが手伝ったからであろう。Hirt m. - mokushi(第3巻3章単語集)もドイツ語母語話者が『和英語林集成』などを使っても出て来ない訳語である。Hirt は、今日なら「牧童」や「牧人」や「羊(牛)飼い」などの訳語が使われるだろうが、mokushi というのは間違いではない。「牧士(もくし)」は放牧場の管理者で江戸時代には武士が任命されていた職名のようなものである。また、典型的な「種」でないものに「カイコの種」のように現在でも専門用語として使うが、外国人が辞書をもとに「カイコの種」のように訳せなかったはずである。Seidenwürmerei s. -

kaiko-no-tane (第1巻12章単語集)。第3巻7章単語集で *weise - seijin-no-yo-naru* と書いているが、「聖人のようなる」という言い方は『和英語林集成』の英和の部にある *wise* の訳語とはまったく違う。WIZE, a. Kashi'koi; rikona; chiye aru. どちらが適当であるかは別にして、「聖人のようなる」という訳語も、苦勞して、考案したに違いない。

日本人の協力なしには『ドイツ語の読み物と演習』は成立しなかったであろうことは確認できたと思うが、手伝ったのが日本人教員だとして、日本人教員とは誰だったのだろうか。本書が作成された大学南校の日本人教員については、大学南校の後継の南校の明治5年の時間割には3人の日本人教員、相原少助教、川上正光、山村徑基の名前がある。南校の時間割にある3人が大学南校でも教えていたのだろうか。寺岡寿一編の『官員録・職員録』(第1巻, 1976)を利用して調べてみると、明治3年6月の和泉屋版職員録には、川上正光の名前は少得業生として見つかるので大学南校時代にすでに教員になっていたことは間違いないだろう。明治5年の南校のドイツ語の時間割で一番位が上だと思われる相原重政の名前は明治3年6月の職員録には見つからない。明治4年11月の和泉屋版・須原屋版の袖珍官員録では文部省のところに相原は十一等出仕の少助教として、川上は十二等出仕の少助教として、山村徑基(徑基, 一歳<sup>31</sup>)は十四等出仕の少助教として記載されている<sup>32</sup>。相原が大学南校でも教員になっていたであろうことは、挫折した大学南校から南校にかけての独和辞典編纂事業のまとめ役になっていたことから知られるが(山岸 1937a : 61-63, 1937b : 3-4)、明治3年の『ドイツ語の読み物と演習』の第1巻の作成に関わった可能性があるのかどうかは不明である。

さて、いずれにしても、かれらはどのようにドイツ語を勉強したのだろうか。ドイツ留学によってドイツ語を勉強してきたということも知られていない。3人の日本人教員は独学でなければ他の日本人からドイツ語を学習したことになる。相原と川上については生年が分かっている。相原重政(1847～1914)は「大学得業生、文部権中助教、南校監子を歴任、[...]後年、統計学者として活躍した」(上村 2001:28)ひとらしい。川上正光(1852～1919)は「南校及び東京医学校でドイツ語を教えた後、明治10年8月より(東京大学)医学部助教を勤めていた」(上村 2001:285)。

相原と川上の二人が『ドイツ語の読み物と演習』の作成に加わった可能性はあると思うが、出版されたのが1871年なのだから、相原は24歳になるかならないかであり、川上は19歳になるかならないかの年齢だったはずである。大学

南校ではずいぶん若い教員が働いていたものである。これだけ若ければドイツ語学習暦がそれほどあるはずはない。しかも、我が国のドイツ学は1860年に蕃書調所で始まったに過ぎず、10年ほどの歴史があるに過ぎない。蕃書調所で独学でドイツ語を始めた市川兼恭や加藤弘之やかれらに近い先生から教わったことは間違いないだろう。市川のもとで学習した人たちについては日記などからかなり分かっているようであるが、二人の名前はない。独和辞典も出版されていない時代である。ドイツ学を始めた市川兼恭や加藤弘之ならば蘭学を修めていたので、オランダ語の知識をドイツ語学習に利用することはできた。相原や川上の場合はどうであったろうか。年齢から言って、オランダ語の知識はあってもほとんど役に立たなかったのではないだろうか。

## 5. 要約と未解決の問題

『ドイツ語の読み物と演習』（第1巻、第3巻、大学南校、1871）の編著者問題についてのわたしの結論は以下のようにまとめられる。

- a. 『ドイツ語の読み物と演習』第3巻は葵文庫本の貼り紙が示しているようにゴットフリート・ワグネルが著者であると思われる。
- b. 『ドイツ語の読み物と演習』第1巻の編著者は、カデルリーよりもワグネルである可能性の方が高く、カデルリーの関与は限定的だったと思われる。
- c. 教材作成においては日本人（教員）の協力も不可欠であったはずだし、第1巻の日本語への翻訳については、日本人が行なったと考える方が自然だと思われる。
- d. 外国人教師の聞き取りの結果と見られる日本語の間違ひも観察されるので、日本人が翻訳したものを外国人教師が耳で聞いて、ローマ字化を行なった可能性が大きいと思われる。

最後に、今後の調査で分かるかもしれないことなどについても触れておきたい。編著者問題を考えるにあたって利用はしなかったが、『ドイツ語の読み物と演習』に独特の言語的な特徴がある。japanesisch と sz の使用である。

前年の『カデルリー文典』の扉では大学南校のことを「帝国日本のアカデミー」と説明しているが、形容詞 kaiserlich-japanisch が使われている。ところが、同じく1870年（明治3）刊行の『最初のドイツ語レッスン』では、これが

kaiserlich-japanesisch になっている。japanesisch という語形は古形やまれな形式として出ている辞書はまれにあるが、ほとんど誤用と言っていいものだと思う。インターネット上の古書店の連合体 ZVAB で検索しても japanesisch が含まれる書籍は検索されない。現代でも使われることがあるのは chinesischn などの混同からだろう。じつは、『ドイツ語の読み物と演習』第1巻でもこの japanesisch が使われている。64 Japanesische Meilen(第1巻8章)。japanesisch という特殊な語形が第1巻で4回使われている。他に Japanesiche と s が落ちたと見られる箇所が1箇所ある。japanisch という今日正しい語形は第1巻では使われていない。『カデルリー文典』の扉以外では japanisch の使用例もなく、カデルリーが決して japanesisch を使わなかったかということは分からない。同じことはワグネルにも言えて、『ドイツ語の読み物と演習』第3巻では japanesisch が使われていないが、japanisch が出てくるのも1回だけである。ワグネルの場合は、後年のドイツ語論文が『追懐集』に再録されているが、そこでも japanisch しか使っていない。カデルリーもワグネルも japanesisch を使わないなら、japanesisch は大学南校の日本人教員が使ったのだろうか。じつは、1872年(明治5)に出版された『享和袖珍字書』がタイトルを *Deutsch-Japanesisches Taschenwörterbuch* としている<sup>33</sup>。しかも、「ドイツ語学習者の日本青年及び日本の文字や日本語のできるひと向け」という説明がタイトルに続くのであるが、ここでも2回 japanesisch という形容詞を使っている。『享和袖珍字書』の編者のひとり小田條次郎は幕府開成所で「独逸学世話心得」をしていたひとであるから、大学南校のドイツ学の日本人教員とも直接つながりがありそうであり、japanesisch を使うのは開成所以来の伝統的な誤りであったかもしれない。本稿では『ドイツ語の読み物と演習』のドイツ文の書き換えは当時の日本人教員にはできないであろうと推定したが、japanesisch を書き加えたのが日本人教員ということになれば日本人教員の関与は本稿で想定した以上に大きなものであったかもしれない。なお、地名や地名から派生した形容詞は通常の語彙ではないということもあって、小型の辞書の見出し語としては立てにくいのか、japanisch も japanesisch も明治5年の『享和袖珍字書』と『和訳独逸辞典』、明治6年の『官許独和字典』を調べてみたが、どの辞典も見出し語には採用していない。

また、ドイツ語のラテン文字表記でも日本語のローマ字表記でも sz が使われているが、どちらも普通のことではないし、理由も不明だ。ドイツ語のラテン文字表記の際の sz について若干のコメントを加えておきたい。ß という文字は今日でもアルファベットではエスツェットと発音し、もともとはエス(s)とと



ツェット (z) が複合した文字である。しかし、当時、ドイツ語をラテン文字表記する際に sz が普通に使われていたという事実はない。Poschenrieder (1997) では、18 世紀末から 19 世紀の文法家たち (Gottshed, Adelung, Heyse, Grimm) が今日なら ß と ss を使い分けるような語彙について、どのように表記していたかをまとめているが、ラテン文字でドイツ語を書く場合に sz を使うひとはいない。ワグネルの後年の論文もラテン文字で書かれているが、ß は ss で書かれている<sup>34</sup>。明治初期にドイツ語入門教材として大々的に利用されるようになる Albert Haesters の *Fibel oder der Schreib-Lese-Unterricht für die Unterklassen der Volksschule*。いわゆる『ヘステル氏第一読本』であるが、1871 年に Essen で刊行の 323 版を調べてみたが、後半に所収されているラテン文字の読章に sz は使われず ss になっている。それが『ドイツ語の読み物と演習』では、なぜ sz を使って書かれているのだろうか。sz は誰が使ったかという問題は、場合によっては、日本人教員ということになるかもしれない。というのは、葵文庫に幕末の「外国方」や「開成所」の印記のある蘭独辞典 (AN44、蘭独の部だけが 2 冊所蔵されている) があるが、ドイツ語の書名が *Neues, vollständiges deutsch-holländisches und holländisch-deutsches Wörterbuch, nach den besten und neuesten Quellen bearbeitet. Zweiter Theil, Amsterdam: G. W. Tielkemijer, 1851.* という辞書であるが、編著者名はない。この辞書を調べるうちに vlijt (オランダ語「熱心」) のところに der Fleisz と書かれていて、sz 表記を使っているのが見つかった。sz を統一的に使用しているわけでもないが、der weisze Flusz という訳語も見つかった。開成所のドイツ学教員はこの辞書も使ってドイツ語を学習したはずで、この辞書などでドイツ語を勉強した日本人が sz を使った表記方式を学習していた可能性もあるだろう。そうだとすれば、『ドイツ語の読み物と演習』への日本人教員の関与は、やはり、本稿で結論として想像した以上のものだった可能性が出てくる。しかし、この問題も単純に解決しそうにないのは、前年の『ドイツ語の最初のレッスン』では別の表記法をとっているからだ。第二部 15 ページに「ドイツ文字とラテン文字」という題の文章があり、同一内容の文章が一行ずつドイツ文字とラテン文字で書いてある。ウムラウトはどちらの文字でも使われているが、ドイツ文字で ß が 4 箇所使われているが、ラテン文字ではすべて ss になっている。ラテン文字でドイツ語を表記する普通の書き方をしていたことになる。『ドイツ語の読み物と演習』第 3 巻ではラテン文字でドイツ語を書く場合にウムラウトも使わないのを原則にしていたことと併せてうまく説明ができない。さらに、ヘボンの『和英語林集成』(再版、1872、明

治 5) をもとに作られた日本で最初の和独辞典『和独対訳辞林』(1877、明治 10) も Radieszchen, eine weisze Blume などと sz を使っているが、これもなぜなのだろうか。これについては、大学南校とのつながりの可能性があることも指摘しておきたい。この辞典の編者のひとり斎田訥於は、ドイツ語塾時習社の開学願書の記載によると、「明治 4 年 4 月から 11 月まで南校教師ワグネルに師事したが、5 年 2 月から 6 月まで小助教相原升二郎についた」とあるからである<sup>35</sup>。

本稿の研究は、静岡県立中央図書館葵文庫に幕府旧蔵書としてのドイツ語関係図書だけでなく明治初年の大学南校のドイツ語教材も残されていたおかげでできたものである。図書館のご好意で『ドイツ語の読み物と演習』の第 1 巻と第 3 巻を長期間にわたって静岡市の本館で閲覧することができた。いい機会であると思い、全文をパソコンに入力して、WEB 版を静岡大学人文学部言語文化学科のホームページからたどれる場所で公開している。関心のあるひとはご覧になっていただきたい。静岡県立中央図書館の協力がなければ大学南校の教材や葵文庫中の辞書を調査することができなかった。感謝したい。

## 参考文献

- 荒俣 宏 (1991) : 『開化異国助っ人奮戦記』, 小学館
- 池田哲郎 (1963) : 「本邦におけるドイツ学の創始」, 『蘭学資料研究会研究報告』  
124 号, 3-15
- 石附 実 (1992) : 『近代日本の海外留学史』, 中公文庫
- 井上哲次郎 (1934) : 『日本に於ける独逸語研究の起源及び其の發展』, 日獨文化  
協會
- 加藤知己・倉島節尚 (1998) : 『幕末の日本語研究 S. R. ブラウン会話日本語  
一複製と研究・索引』, 三省堂
- \_\_\_\_\_ (2000) : 『幕末の日本語研究 W. H. メドハースト英和・  
和英語彙一複製と研究・索引』, 三省堂
- 加藤弘之 (1979) : 『弘之自傳: 復刻』, 長陵書林
- 上村直己 (1985a) : 「最初のお雇い独語教師 大学南校教師カデルリー」, 『日本  
古書通信』50 巻 4 号
- \_\_\_\_\_ (1985b) : 「明治初年の東京のドイツ語塾について」, 『熊本大学教養部  
紀要』(外国語・外国文学編), 20 号, 43-63
- \_\_\_\_\_ (2001) : 『明治期ドイツ語学者の研究』, 多賀出版

- 教育史編纂会編 (1964)：『明治以降教育制度発達史』第1巻，龍吟社
- クライナー，ヨーゼフ (2003)：『江戸・東京の中のドイツ』，講談社学術文庫
- 小関恒雄／北村智明訳編 (1991)：『クニッピングの明治日本回想記』，玄同社
- 故ワグネル博士記念事業会 (1938)：『ワグネル先生追懐集』
- 芝 哲夫 (1999)：「ゴットフリート・ワグネル (1831-1892)」『和光純薬時報』  
Vol.67, No.3, 2-4
- 杉本つとむ (1989)：『西洋人の日本語発見』，創拓社
- 鈴木重貞 (1975)：『ドイツ語の伝来』，教育出版センター
- \_\_\_\_\_ (1981)：「復刻版『倅和袖珍字書』『和訳独逸辞典』『独和字典』『和独対訳辞林』付録」，三修社
- 園田尚弘 (2004)：「明治初期に現れた独和辞書の研究」，園田尚弘・若木太一編  
\_\_\_\_\_ (2004)：『辞書遊歩』，九州大学出版会，95-112
- 高橋輝和 (1988)：「『官版・独逸単語篇』のドイツ語について」，『洋学資料による日本文化史の研究Ⅰ』，吉備洋学資料研究会，57-82
- \_\_\_\_\_ (1989)：「再発見された2冊目の『官版・独逸単語篇』」，『洋学資料による日本文化史の研究Ⅱ』，吉備洋学資料研究会，45-101
- \_\_\_\_\_ (1990)：「開成所教授・市川齋宮のドイツ語」，『洋学資料による日本文化史の研究Ⅲ』，吉備洋学資料研究会，47-58
- \_\_\_\_\_ (1993)：「『独逸訳附単語篇』とその前版『独逸単語篇』について」，『洋学資料による日本文化史の研究Ⅵ』，吉備洋学資料研究会，63-71
- \_\_\_\_\_ (1994)：「『独逸文典字類』のドイツ語項目」，『洋学資料による日本文化史の研究Ⅶ』，吉備洋学資料研究会，9-67
- \_\_\_\_\_ (1995)：「『普語箋』について」，『洋学資料による日本文化史の研究Ⅷ』，吉備洋学資料研究会，31-86
- 田中梅吉 (1968)：『日獨言語文化交流史大年表』，三修社
- 土屋喬雄 (1939)：『日本資本主義史上の指導者たち』，岩波新書
- \_\_\_\_\_ (1944)：『G・ワグネル維新産業建設論策集成』，北隆館
- 釣 洋一 (2004)：『江戸幕末・和洋暦換算事典』，新人物往来社
- 寺岡寿一編 (1976)：『明治初期の官員録・職員録』第1巻，寺岡書洞
- 丸山國雄 (1936)：『我が国に於ける独逸学の勃興』日独交通資料 第三輯
- 文部省大臣官房報告課編 (1890)：『日本教育史資料』(一)
- 宮永 孝 (1993)：『日独文化人物交流史』，三修社

- 宮永 孝 (2004) : 『日本洋学史』, 三修社
- 山岸光宣 (1937a) : 『学窓夜話』, 東苑書房
- \_\_\_\_\_ (1937b) : 「大学南校と独逸学」, 『学燈』41 卷 1 号, 2-5
- \_\_\_\_\_ (1939a) : 「日本に於ける独逸語研究の沿革」, 『独逸文学』第三年第三号, 171-191
- \_\_\_\_\_ (1939b) : 「大学南校文書の独逸学関係事項」, 『書物展望』9 卷 5 号, 384-388
- ユネスコ東アジア文化研究センター編 (1975) : 『資料御雇外国人』, 小学館
- 吉田光邦 (1968) : 『お雇い外国人・産業』, 鹿島研究所
- 寄田啓夫 (1989) : 『ワグネル伝』考 (一), 『香川大学教育学部研究報告第 I 部』77 号, 53-68
- \_\_\_\_\_ (1990) : 『ワグネル伝』考 (二), 『香川大学教育学部研究報告第 I 部』78 号, 1-25
- 渡辺 実 (1964) : 「幕府の英仏独語研究の展開」, 『人文』10 号, 京都大学教養部, 33-55

#### 【欧文】

Poschenrieder, Thorwald (1997): „S-Schreibung – Überlieferung oder Reform?“ *Die Rechtschreibreform*. H.-W. Eroms, H. H. Munske (Hgg.), Berlin, 173-183

---

#### 注)

- <sup>1</sup> 『カデルリー文典』は大阪大学と東京大学と立教大学の所蔵が NACSIS Webcat で確認できる。他にも香川大学神原文庫のものが知られている。葵文庫には存在しない大学南校のドイツ語教材である。
- <sup>2</sup> 『最初のドイツ語レッスン』で Webcat で確認できるのは九州大学と大阪大学と筑波大学である。葵文庫にも一冊ある。
- <sup>3</sup> 書名は、正確に書けば、ラテン文字の大文字で、LESE-UND のようにハイフンの後にスペースが無い書き方をしている。
- <sup>4</sup> 1872 年に、読章をのぞいて、文法部分を圧縮した第 2 版が印刷され、さらに 1878 年に第 2 版復刻版が印刷されている。北海道大学図書館に第 2 版が所蔵されていて、東北大学図書館に第 2 版復刻版が所蔵されている。

- <sup>5</sup> 松村 (1970:223) は『独和会話集 (Eine Sammlung Deutsch-Japanischer Gespräche)』(川上正光著)をあげ、明治5年刊で「大学南校印行」としている。また、この本が『和解独逸会話篇』とおそらく同一だとも述べている。明治5年なら大学南校ではありえず、「南校」だと思われるが、筆者は未見であるし、詳細は不明だ。
- <sup>6</sup> 田中 (1968:490) に「第3巻4冊」とあるが、3巻で葵文庫に現存しているのは2部である。
- <sup>7</sup> 幕末から明治初期にかけての留学生についてはかなり調査されていて、『近代日本の海外留学史』(石附実, 中公文庫, 1992)によると、幕末の海外留学者でドイツに留学したのは慶応2年に出発して明治6年に帰国した赤星研造しかいないし、明治三年には大学東校がドイツ医学の導入を決め、すでに在独中の2名も含め、13名を官費でドイツに留学させているぐらいが目立つ動きである。明治元年か明治2年に出発して、この13名の留学生以前にドイツ留学している者は『近代日本の海外留学史』のリストで探すと、明治元年に出発して、後に外交官になり、外相を勤めた青木周造が見つかる他は明治2年にドイツに留学している有馬治(次)兵衛がいるだけである。
- <sup>8</sup> 「大体明治に入るともう英、仏、独時代に入り蘭学は頽れてきて、2年には江戸の適塾でも蘭語は教えていない」(池田 1963:6)。
- <sup>9</sup> 「オランダ政府から徳川将軍家慶にスタンホープ型手引活版印刷機一台と欧文活字百余種、その他印刷用小道具類一式が贈られた。しかし、これらはすぐには役立てられず放置されていた。[...]市川は幕府の倉庫に死蔵されていた上記の活版印刷セットの活用を思いつき、時計職人の山本勘右衛門の助けを借りて、[...]安政五(一八五八)年にオランダ語教科書『レースブック』の印行にこぎ着けた。」(西野嘉章編「歴史の文字 記載・活字・活版」東京大学総合研究博物館 HP)。このスタンホープ印刷機は後に大蔵省印刷局、現在の国立印刷局に引き継がれ重要文化財になっている。黎明期の我が国の西洋印刷を支えた印刷機である。
- <sup>10</sup> 葵文庫には第1巻が2部あるが、2部ともむき出しの厚紙の表紙で装丁が完成していない感じのものである。一方、第3巻は図2にあるようにきちんと装丁されていて、表紙にも扉と同じ内容が印刷されている。
- <sup>11</sup> 釣洋一 (2004) によるが、田中 (1968:464) では1871年が「明治3年11月21日から明治4年12月2日」とされている。和暦と西暦の対応は単純に計算できるものではないらしく、わたしにはどちらが正しいか判断できない。

- <sup>12</sup> 先行研究でも、図書館の情報をそのまま踏襲しているのか、明治4年として  
いるものが見られる(宮永 2004:340)。
- <sup>13</sup> 前年の『ドイツ語の最初のレッスン』では日本の実情に合わせた書き換えも  
なく、Japan(「日本」)やjapanisch(「日本の」)などの日本が関連した基本  
語彙がまったく使われていない。しかも、挿絵入りの本から文章を取ってき  
たものと思われるが、挿絵についての触れている文章まで内容を書き換えず  
にそのまま残されている。ラテン文字の大文字と小文字の順番が逆になっ  
ているところも見過ごしているし、日本人教員が編集したとしてもおかしく  
ない内容である。『ドイツ語の最初のレッスン』ならば日本人がドイツ語母語話  
者にほとんど助力を仰がないでも作れる内容である。
- <sup>14</sup> 「ヴァーゲナー」「ワーゲナー」「ワグナー」などは項目として立てられてい  
ないし、「ワグナー」では「ワグネル」を見よとなっている。ワグネルと混同  
されそうな似た名前の御雇い外国人は明治期にはいなかったようである。
- <sup>15</sup> 図5ではIltisは別名Illingであるとしているようであるが、このIllingはこ  
れまでのところ辞書・事典に掲載が見つからない。
- <sup>16</sup> この『東京帝国大学五十年史』のクニッピングの採用開始時期は間違ってい  
るようだ。本人も『回想記』で1871年5月2日からの契約と書いているし(小  
関/北村 1991:100)、『御雇外国人』でまとめられた史料のうち複数で明治  
4年3月13日となっているので、こちらが正しいと思われる。1871年5月2  
日は明治4年3月13日である。
- <sup>17</sup> 『スイス歴史百科事典』(HLS)というドイツ語、フランス語、イタリア語の  
三ヶ国語のプロジェクト(1988年以降)で、全12巻の予定で書籍も出版され  
るが、インターネット上でも無償情報提供が1998年から始まっている。ドイ  
ツ語版のURL：<http://www.lexhist.ch/externe/protect/deutsch.html>
- <sup>18</sup> 『カデルリー文典』ではJakob Kaderlyと記載されている。『クニッピングの  
日本回想記』にはKaderleという表記も見つかる。
- <sup>19</sup> ドイツ語版Wikipedia(2006年4月検索)に「1850年時点で人口426人」と  
あり、現在はさらに人口が少なくなっている小村であると書いてある。
- <sup>20</sup> 「3人め」という表現の仕方はクニッピング自身が『回想記』でしているが、  
正確には、カデルリー、ワグネル、ホルツに続いてであるから4人めであっ  
たが、ホルツはプロイセン政府から派遣されていて、独自のクラスを受け持  
ち、大学南校の他の教員たちとは別格の扱いだったようだ。クニッピングは  
『回想記』で「彼は独自に二クラスを持ち、日本人の管理下にあるわれわれの

日本の学校から全く独立していた」(p.113)と書いている。なお、クニッピン  
グは、航海士から大学南校の教師になり、後に、気象学者として日本で活躍  
し、日本最初の天気予報を出したことで知られている。

<sup>21</sup> 『ワグネル先生追懐集』(1938)に再録されている。

<sup>22</sup> 土屋(1939:211)に「明治四年廃藩置県の際佐賀を去り、東京に出て、大学  
南校(東京帝大の前身)の教師となり、翌年大学東校(東京帝大医学部の前  
身)に転じ」とある。

<sup>23</sup> 寄田(1990:6)。

<sup>24</sup> 訳語「動物園」の成立は福沢諭吉に由来するという説が一般的であり、事実、  
『西洋事情初編』(慶応2年刊行)の「博物館」ののところでは「又動物園植物  
園なるものあり」と書いている。しかし「動物園」の内容が一般に理解され  
ていたとは思えない。だからこそ、福沢は「動物園には生ながら禽獣魚蟲を  
養へり」と説明しているわけであろう。

<sup>25</sup> ドイツ語式の引用符を正しく付けていないという間違いは大学南校教材では  
よく見られるが、活字がなかったのかもしれないし、文法でも周辺の領域  
であるから、まだ習得するに至っていなかったのかもしれない。

<sup>26</sup> 『東京帝国大学五十年史』(上冊)。

<sup>27</sup> 上村(1985b)。

<sup>28</sup> 上村(1985b)。

<sup>29</sup> 獨協中学・高等学校同窓会のホームページ上で「目で見ると獨協百年」の一部  
として公開されている。

<sup>30</sup> とはいえ、当時ヘボンが利用できたのは『日葡辞書』そのものである可能性  
はあまりないようだ。明治学院大学図書館の『和英語林集成』デジタルアー  
カイブスには『日葡辞書』の仏訳であるパジェスの『日仏辞書』を使った可  
能性が指摘されている。

<sup>31</sup> 『東京帝国大学五十年史』には「徑基」と「一蔵」の両方の名前が見られる。

<sup>32</sup> 袖珍官員録の読み方が判然としないところもあり、ここでは全員を「少助教」  
としたが、この時点では誰も「少助教」ではないのかもしれない。官員録の  
表では少助教としてまず何人かの名前をあげ、同じ少助教でも等級が異なる  
ものについて「十等出仕」から「十五等出仕」まであげているように読んだ  
が、別の可能性あるかもしれない。職員録(和泉屋版、明治3年6月)のど  
きは「大学校」のところに「大得業生・中得業生・少得業生」という最下位  
の教員の職種があったが、袖珍官員録の文部省の項にはなくなっている。上

村（2001：16）に相原が明治4年12月24日に文部省少助教に昇任したという記述があるが、これが正しいとすれば、明治4年11月時点では全員が少助教ではないはずである。また、3人全員が少助教なら明治5年の南校時間割で相原だけが「相原少助教」とされている理由がよく分からない。

<sup>33</sup> 鈴木（1981：7）でも「今の *japanisch* が *japanesisch* となっている」と指摘されているが、当時も *japanesisch* 一般的な形でなかったことは本文で述べる通りである。

<sup>34</sup> ただし、ところどころ、fs という誤植も見つかるので、エスツェットを入れた原稿をワグネルが書いていたものと思われる。

<sup>35</sup> 上村（1985b：56-57）。

## 追 記

脱稿後に『カデルリー文典』（1870）の大阪大学本の全ページのコピーおよび東京大学本の表紙と最終ページのコピーを入手した。予想に反して、ドイツ文字ではなくラテン文字で書かれていた。ßはまったく使われず、ss が使われている。正書法の説明でドイツ文字のßを説明する場合にだけ sz が使われている。表紙で見る限り、東京大学本は大阪大学本と同一内容であるが、240 ページで終わっている不完全本である。

本稿では、1878年に出版された第2版復刻版の東北大学本をもとに、『カデルリー文典』が基本的にドイツ文字で書かれ、『ドイツ語の読み物と演習』とは異なっていると述べたが、大阪大学本ではこのようなことは言えない。また、ドイツ文字でのßについてもカデルリーが独特の使い方をしていることを『ドイツ語の読み物と演習』第1巻の編著者問題に利用したが、『カデルリー文典』の大阪大学本ではラテン文字が使われ、ßが使われていないので、カデルリー自身がドイツ文字化に関わっていないとすれば、このような主張もできないことになってしまう。ドイツ文字で書かれた『カデルリー文典』はどの版からなのかという問題は未解決である。筆者は過去に『カデルリー文典』初版の香川大学神原文庫本の調査をしているが、ドイツ文字で書かれていたという記憶があるので、1870年版であってもドイツ文字で書かれているものがある可能性がある。

大阪大学本では第1刷ということばは使っていないが、巻末の注記の内容から考えて初版第1刷と見なしてよいと思われる。カデルリーは、正誤表を付けない理由として、製本が終わる前から授業で使っており、40冊あまりを残して



生徒に配布済みであることと、すでに第2刷 (die 2. Auflage 「第2版」ということばを使っている) の印刷が始まっていることを理由にあげ、誤植は第2刷の訂正で対応したいと述べている。

今回は『カデルリー文典』について詳しく触れることはできなかったが、1870年に初版が出たあと、1872年に第2版が出版され (北海道大学本)、1878年に第2版復刻版がドイツ語塾の塾長として知られる中川忠明を翻刻出版人として出版されている (東北大学本)。さらに、1886年には Seishido (誠之堂?) から第3版が出版され、国会図書館に所蔵されている。明治初年に出版された大学南校のドイツ語教材の中では唯一多くの版を重ねたのが『カデルリー文典』である。